

新生代	第四紀	1万年前 259万年前	堆積岩類 (野里安山岩)	火砕流堆積物 (入戸・阿多)	【凡例(層序表)】
	新第三紀	2303万年前	深成岩類 (大隅花崗閃緑岩)		
	古第三紀	6600万年前	日南層群		
中・古生代	白亜紀 ジュラ紀 三疊紀		四万十層群 (高隈山層) (郷之原層)		

鹿児島フィールドミュージアムより転載

火山活動により 形作られた南九州

鹿児島湾は約90万年前に出現したことが報告されています。それ以前は大隅半島と薩摩半島が接していたと考えられています。南九州の大地が東西に引き裂かれ、溝状に陥没した「鹿児島地溝」に海が入り、2つの半島が離れて大隅半島ができたようです。

「鹿児島地溝」の中に堆積した海の地層(国分層群)は、地溝の北部にあたる始良市や霧島市に広く分布し、鹿児島市や指宿市ではボーリング調査で地下に存在していることが報告されています。この「鹿児島地溝」の出現した理由に火山活動があります。その証拠に、「鹿児島地溝」に沿って、カルデラが並びます(上図カルデラ分布図参照)。日本の10%にあたる11の活火山も、この「鹿児島地溝」に沿って南北に並んでいます。

まさに、この南九州の大地の姿は、「鹿児島地溝」に沿う地域に上昇してきたマグマの活動の賜物と言えます。

012

鹿屋市の地形・地質1

○概要

鹿屋市の北西部に当たる高隈山周辺には、中生代白亜紀の四万十層群(砂岩、頁岩、塩基性岩など)と、それを貫く優白色の高隈山花崗岩が分布しています。また、高隈山体と南の大隅山体に挟まれた中央の低地帯は、始良カルデラの噴出物である入戸火砕流(笠野原等のシラス台地)が広がっています。

南部の吾平地区に広がる福師岳付近には、新生代古第三紀の日南層群の砂岩と頁岩からなる互層(交互に重なり合う層)が分布しています。

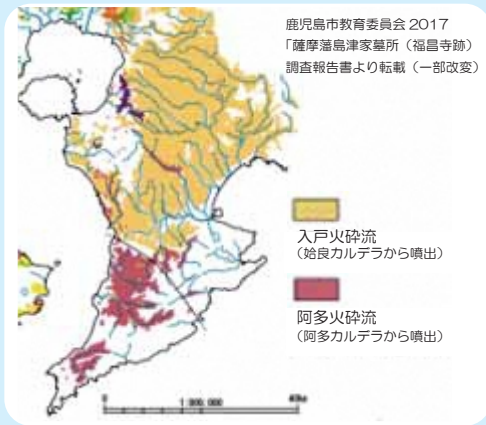
また、福師岳の西方大始良地区の横尾岳付近は、新生代新第三紀の火山活動で噴出したと考えられる輝石安山岩からなる300m近い丘陵が見られます。この安山岩は、主に緑灰色で柱状節理や放射状節理がよく発達しています。

鹿児島湾沿いの海岸線付近には、入戸火砕流より古い時代に噴出した阿多火砕流の溶結凝灰岩の美しい海岸線が見られます。この溶結凝灰岩は、赤みを帯びた加工しやすく美しい石で、荒平石と呼ばれ、昔から家屋の石垣など、石材として広く利用されてきました。

○高隈山地の特徴と鉾山

高隈山地は、大隅半島の中央部に位置し、鹿屋市と

いと あた
入戸、阿多火砕流堆積物分布図



カルデラ分布図



垂水市との境界付近に連なる山地であり、南北25km、東西15km、標高1,000mを越す山岳群（7座）があります。これらを総称して高隈山と呼んでおり、高峯、大隅湖、猿ヶ城溪谷などの景勝地は「高隈山県立自然公園」に指定されています。【項目016参照】

地質的には、白亜紀後期以降に堆積したであろう四万十層群と呼ばれる地層等が隆起したものと、その上に、阿多カルデラ、始良カルデラなどの火山活動による噴出物が積み重なっているところもあります。

また、これらの堆積岩に、地下深いところでマグマが入り、そのマグマが冷えて（高隈山花崗岩）になりましたが、そのマグマの熱によって堆積岩は変成し、大笠柄岳や御岳などの山塊に見られるように、緻密なホルンフェルスという変成岩となって侵食から取り残され、尾根状の峰となって残っています。

大笠柄岳の西側斜面には、直径約7kmの花崗岩ドーム「高隈花崗岩体」があり、その周辺部にタングステンやモリブデン、金などの鉱脈が存在しています。また、鹿屋体大前から御岳へ向かう鳴之尾林道には、明治から大正時代に大隅重金鉱山として、タングステンや金などを対象に採鉱された場所もあります。

火砕流堆積物

鹿屋市の基盤をなす地層は、深海に堆積した四万十層群・高隈山層と日南層群、これらの堆積層に貫入した花崗岩です。これらの古い地層が侵食された地表面を覆う地層は、鹿児島湾の湾口部に位置する阿多カルデラから、約11万年前に噴出した阿多火砕流、湾奥部に位置する始良カルデラから、約3万年前に噴出した入戸火砕流の2つの火砕流堆積物です。

阿多火砕流の溶結凝灰岩は、鹿児島湾に面した海岸に露出し、荒平天神の天神島などの美しい景観をつくりだしています。また、この溶結凝灰岩は荒平に石切場があって、最近まで「荒平石」の石材名で採石されてきました。また、南から流れてきた阿多火砕流は高隈山の南斜面を駆け上がり、高須川の上流まで達しています。

入戸火砕流は、上記火砕流分布図では省かれていますが、南九州全域を覆い、北は熊本県の人吉盆地、東は宮崎市まで達しています。

【鹿児島フィールドミュージアムHP】





シラスの崖



笠野原台地

荒平石・細山田石

採掘・加工が容易なため以前は建築用石材として広く利用されてきた溶結凝灰岩は、高温で厚い火砕流堆積物の内部が凝結して固い岩石になったもので、軽石などが押しつぶされて、黒っぽいガラス質のレンズ状になっているのが特徴です。

天神町から南東方に通じる道路沿いで溶結凝灰岩が採掘され、荒平石の名称で特に石垣石として用いられています。これは、九州南部には加久藤カルデラ、始良カルデラなどがありますが、11万年から5.5万年前に活動していた阿多溶結凝灰岩になります。

また、串良町で碎石されている細山田石も、同様に阿多溶結凝灰岩であり、荒平石はピンク色・細山田石は灰色の特徴があります。

013

鹿屋市の地形・地質2

○地形

鹿屋市の地形は、南部には肝属山地があり、北部には高隈山地がそびえており、西縁（鹿児島湾側）にも比較的高い地形が南北に形成されています。その凹地はほとんどシラス台地が占め、その下には阿多火砕流堆積物が混在しています。

○シラス台地

シラス台地は、九州南部に数多く分布している火山噴出物からなる台地です。鹿屋、串良、志布志付近に広く分布しています。

台地面の高さは鹿屋市街地より下流の肝属川沿いが最も低く、南方、西方及び北方に向い緩やかに高度を増し、肝属郡北西部ではかなりの高さには達しています。

シラスは、細粒の軽石や火山灰から形成されています。水の浸食に弱いため、笠野原台地のようなシラス台地は通常数十mの崖でとりかこまれ、その崖部は台風や梅雨時の豪雨によって崩壊しやすく、大きな土砂災害を引き起こすことが少なくありません。

そんな中、シラスを原料とする工業化が進んでおり、硬質レンガ・タイル・人工軽量骨材・ガラス繊維など、多くのものが開発されています。



鳴之尾牧場近くの白滝
(露出した花崗岩上を流れる滝)



くろぼく土からなる広大な畑

○高隈山周辺の地質

高隈山は砂質岩や泥質岩からなる地層と、おもに、火山性堆積物である郷之原層と名付けられた塩基性岩などの時代未詳層群と、これらを貫く高隈花崗岩からなっています。高隈山地はこの高隈花崗岩が地層や岩石内に入り込むことによってほとんど全域にわたり接触変成作用（火成岩の熱により岩石が変化すること）を受けています。

高隈花崗岩体は垂水市猿ヶ城付近を中心として東西6km、南北9kmの楕円形に分布しています。

色調は、中粒ないし粗粒黒雲母を含むことから、灰白色でゴマのように、黒い粒が入っており大隅地域一帯の墓石として使用されています。

○くろぼく土

くろぼく土とは火山灰と植物が腐って土にかえたもので形成され軽くて細かい粉末のような土です。鹿児島県では曾於、肝属、川辺、指宿、始良、熊毛等に広く分布しており、保水力をもちながら水はけがよい土壌です。曾於、肝属では地域全畑面積の9割以上を占めています。また、甲子園の土にも使われていることでも有名です。

地下資源

鹿屋市における地下資源として、高隈山地における金属鉱床（銅山・鉱山・砂鉄）が挙げられます。

しかし、現在ではいずれも休山しています。



他にも

- ・鹿屋銅山黒岩林道鉱床
- ・梅平鉱区小屋谷鉱床
- ・吉ヶ別府鉱床
- ・砂鉄鉱床

などがあり、多くは高隈山南側斜面に点在し、かつては探鉱または採掘されたこともあります。



かのやばら園

バラと気候

バラは本来、高温多湿が苦手な植物です。

かのやばら園では、素敵なバラが咲き誇っていますが、実は雨の多い鹿屋市の気候は、バラの栽培に適したものではありません。

しかし、品種や栽培方法の工夫により、かのやばら園は維持されています。

鹿屋の気象観測施設

鹿屋市には、気象庁が全国1,300か所に設置する「地域気象観測システム（通称「アメダス」）」という無人の観測施設が、鹿屋（寿（県立鹿屋農業高校内）、吉ヶ別府（下高隈町）、輝北（輝北町市成）の3箇所にあります。アメダスは降水量の他、風向・風速、気温等の観測を24時間自動的に行い（吉ヶ別府のアメダスは降水量観測のみ）、大雨や台風などの気象災害の防止や軽減に重要な役割を果たしています。

その他、気象庁の施設として、地球内外の地磁気の状態や変化を監視する「地磁気観測所」が東原町にあります。「地磁気観測所」は鹿屋の他、茨城県石岡市の柿岡、北海道大空町、東京都小笠原村父島にあり、世界各国の観測所と連携しながら、地磁気の定常的な観測を行っています。



014

鹿屋市の気候

鹿屋市は本土最南端へ伸びる大隅半島のほぼ中央に位置しており、一般的な全国の気候区分によると、

「太平洋側の気候」に分類されます。また太平洋側の気候を細かく分類した場合、鹿屋市は「南海型気候区」に当てはまり、夏は太平洋の暖かく湿気を多く含んだ南から吹く季節風の影響で多雨多湿、冬は北西から吹く冷たく乾いた季節風の影響で少雨乾燥な天候となります。

春になると高気圧と低気圧が交互に通過するため、天気は数日の周期で変わります。毎年6月から7月上旬頃が梅雨の時期となります。この時期が一年の中で最も雨が降りやすく、梅雨末期の集中豪雨など雨による災害が起きやすくなる時期でもあります。また、九州南部は台風の常襲地帯じょうしゅうちたいです。年平均4個の影響を受け、台風が鹿屋市の西側を通過したときに、風雨が強い傾向にあります。秋になると再び移動性高気圧と低気圧が交互に日本付近を通るようになり、天気は数日の周期で変わるようになります。最近では地球温暖化の影響等により、残暑が秋の終わり頃まで続くことがあります。冬は西高東低の冬型の気圧配置が強くなると、九州山地や霧島山などの東側に位置する鹿屋市は乾いた空気が吹き下ろすため、晴れの日が多くなります。

鹿屋市の雨温図 2020（令和2）年



○気候の特色と災害

鹿屋市は、夏は降水量が多く暑いですが、冬は降水量はそれほど多くなく、比較的暖かくて過ごしやすい気候です。気温や降水量に着目すると、年平均気温は約17.6、年平均降水量は2,856mmであり、全国と比較すると温暖で雨が多い気候といえます。この気温と降水量を鹿児島市と比べてみると、最高気温が約1℃低く、最高気温は2.5℃低い状況であり、降水量は約250mm多い状況です。同じ鹿児島県でも、鹿屋市は鹿児島市よりも少し涼しく、雨が多いところ です。

このような気候の特色がある鹿屋市では、年間の降水量が集中する夏から秋にかけて、自然災害が集中的に発生します。特に、梅雨末期の大雨や台風による暴風雨によって、土砂災害や川の氾濫が時々発生し、市民生活に影響を与えています。

近年では、2016（平成28）年9月の台風第16号通過の際は市の北部を中心に大規模な土砂災害が発生しました。また、2020（令和2）年7月の記録的な豪雨の際は新川町や白崎町、菟川町大園地区など市内各所に浸水被害が発生しました。さらに、2022（令和4）年9月に接近した台風14号は、暴風雨の影響で長期間の停電が発生しました。これは統計史上5番目に低い気圧です。

戦後の風水害の記録

鹿屋市では、戦後発生した様々な風水害によって、人々は甚大な被害を受けました。中でも1976（昭和51）年6月の豪雨災害では、肝属川の増水により市の中心部が冠水するとともに家屋流出、床上浸水、土砂崩れ等が多数発生し、4名の尊い人命が失われました。

また台風被害では、2016（平成28）年台風第16号通過の際は輝北町や高隈を中心に、家屋損壊、床上浸水、土砂崩れや橋梁流出等、甚大な被害が発生し、重軽傷者8名の人的被害を出しました。

さらに2020（令和2）年7月豪雨と呼ばれる大雨では、線状降水帯の影響を受け、1日で7月の降水量を超える雨が降り、7月6日に観測した総降水量と1時間雨量は、統計を取り始めてからのデータの1位を更新しました。





写真は広報かのや 2018年5月号より引用

1 牛根村（現在の垂水市牛根）から撮影された桜島大噴火



石碑から見る大噴火

大噴火による災害は、溶岩や降灰のみならず、降り積もった軽石や火山灰が影響し、市内各地で洪水が起きました。

記念碑は、爆発碑（3か所）、河川等改修碑（8か所）、耕地整理碑（3か所）、移住碑（1か所）の4種類があります。



記念碑（輝北町上百引・岳野小学校跡）

1926（大正15）年3月に、百引岳野と牛根岳野が共同で建立。大噴火後、両岳野全体の世帯数が一時5分の1になったとされています。

串良川改修記念碑（東串良町・豊栄橋左岸）

1917（大正6）年6月建立。大噴火で串良川の源流部が荒れ、土石流や洪水が頻発したため、西串良村と東串良村が連合組合をつくり改修しました。

015

鹿屋市と桜島

○大正の大噴火と鹿屋

1914（大正3）年1月12日、午前8時ごろから、桜島東側と西側の標高500m付近及び山頂から白煙が吹き上がりました。そして、10時15分、標高350m付近の谷間から黒煙が上がり、噴火が始まりました。約10分後には、標高400mからも噴火が始まりました。噴火口からは火炎と噴石が噴出しました。その後、噴煙は7,000～8,000mの高さに達しました。桜島の噴火はしばらく続き、溶岩は斜面を流れ降り、西側の集落を埋めながら海岸線に達しました。また、東側の溶岩は集落を埋没しながら、幅360mの瀬戸海峡を閉鎖し、桜島と大隅半島は陸続きになりました。

当時、西寄りの風が吹いていたため、大量に噴出した軽石・火山灰は大隅半島を広く覆いました。特に肝属郡高隈村（現在の高隈町・下高隈町）、同百引村（現在の輝北町上百引・下百引）、曾於郡市成村（現在の輝北町市成・諏訪原）などでは、軽石・火山灰が厚さ約30cm、最も深いところでは1m以上積もるなど、辺り一面、灰色に埋め尽くされました。これらの噴出物で農地は長い間利用できずに、農業は壊滅的な被害を受けました。また火山灰が排水を妨げ路面が泥状化したり、噴出物で埋没したりして道路が寸断されるな



2 火山灰が積もった杉林（高隈村付近）
 3 4 火山灰が積もった民家（百引村上百引）
 5 軽石・火山灰が積もった畑（同）
 6 火山灰で埋まった川に立つ人々（同）
 噴火後に起きた洪水で池と化した田地（西串良村細山田）
 1～4は鹿児島県立博物館
 『桜島大正噴火写真』
 5～7は講和会編
 『大正三年桜島噴火状況（桜島爆発肝属郡被害始末誌）』から



噴火前と噴火後の作付け状況

桜島の大噴火による降灰は、鹿屋市の農作物にも影響を与えています。野菜、花、たばこ、茶、飼料作物、果樹などに多くの被害をもたらしました。

1973（昭和48）年に制定された「活動火山対策特別措置法」に基づいて、鹿屋市では桜島降灰対策事業が進められました。これにより、野菜、花、果樹のハウス栽培が行われるようになりました。また、たばこや茶の洗浄施設が設置されたり、飼料作物のサイロ貯蔵や機械による刈り取りが行われたりするようになりました。



サイロ
農産物や飼料作物などを保存する容器

ど、市民生活に大きな影響を与えました。河川の上流では土石流や泥流による土砂災害が度重なり、中・下流ではその後も継続して洪水等が頻発しました。この大正の大噴火では、桜島を中心に死者・行方不明者58人、負傷者112人、全焼家屋2,148戸、全倒家屋113戸の被害が発生しました。

○現在の桜島とのかかわり

現在、桜島のマグマの蓄積は、2020年代に大正噴火が起こる前のレベルまで戻っていると推定されており、大正噴火級の大規模噴火への警戒が必要です。

一方、観光面以外では厄介者扱いをされている火山灰ですが、これを有効利用する方法もあります。灰そのものを缶詰にしたり、陶芸の粘土に練りこんだり、^{ゆうやく}釉薬に混ぜて焼くなどの取組がされています。

また、過去の火山灰が堆積してできたシラスについては、古くから研磨材として利用されてきましたが、現在では、シラスコンクリートや石鹼などに幅広く利用されています。

火山灰の有効利用がより拡大されるようになると、桜島は宝の山になることでしょう。



炭焼き窯

笠野原台地開発史～水をもとめて苦難の歴史～から転載



ブナの木

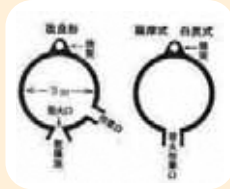
写真提供：大隅森林管理所

炭焼き窯

鹿屋市でも以前は、炭の生産が多く行われていました。木炭は、1955（昭和30）年頃まで高隈の重要な基幹産業でしたが、現在では数戸で生産されているだけとなっています。

「窯の改良」

1955（昭和30）年頃より、火口と作業口を別にした窯が普及し、品質が改善されました。



「穴窯」

白砂の崖などを掘り利用する炭焼き窯です。窯は直径3m、高さ1.2mくらいです。粘土、石で壁を固めて、火口、作業口煙突をつくり原木を入れます。



016

照葉樹の原生林

鹿屋市の照葉樹林は、高隈山に多く自生していることから、ここでは高隈山に自生する照葉樹林について紹介いたします。

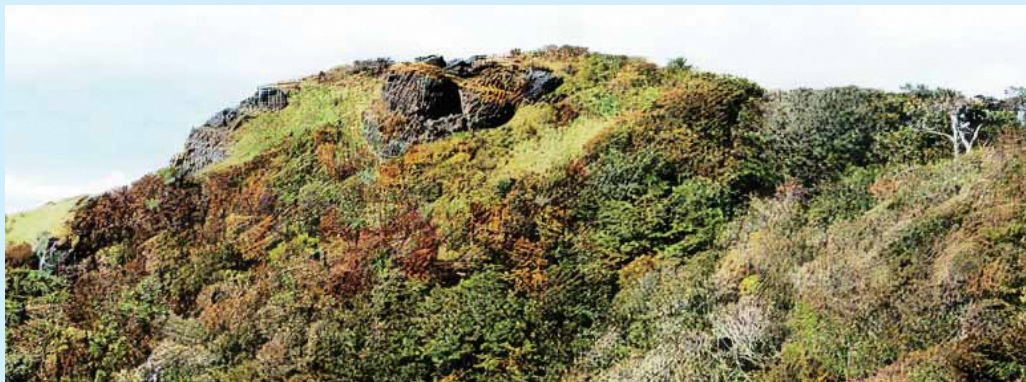
高隈山は世界各国の植物学者が調査に訪れるほどの貴重な照葉樹の原生林を今も残しています。本市の植生は、大部分をスギやヒノキ、サワラなどの植林地植生や耕作地植生が占めていますが、垂水市との境にある高隈山は、林野庁から高隈山生物遺伝資源保存林に指定されています。

植物をみると、麓から500～800mまではイスノキ、シイ、タブなどの照葉樹林で、そこから1,000mまではアカガシの大木が多く、ところどころにモミの大木が目立ちます。頂上近くになると気温が下がるため、温帯にみられるブナの大木があります。

○高隈溪谷の照葉樹林

大隅自然休養林として、溪谷一帯の植物が保護されており、遊歩道（安全確保のため通行止の場合有）に沿って昔ながらの照葉樹林が広がっています。

ツブラジイを中心にイチイガシ、イスノキ、ウラジロガシ、ホソバタブ、ツクバネガシ、アラカシ、マテバシイなど代表的な常緑樹が林立し、中には幹回り5mのイチイガシの巨木も見られます。また、下草植物も豊かで、タカクマホトトギスをはじめシダ類も多種にわたって見られるなど、学術的参考資料林の感があり、サルの生息地にもなっています。



大箆柄岳

写真提供：大隅森林管理所

○大箆柄岳のブナ林

ブナは北方系の植物で、日本の温帯を代表する植物で、大箆柄岳のブナ林はその南限となっており、植生範囲は大箆柄岳のほか小箆柄岳、御岳、平岳、横岳にも僅かながら分布しています。

本来、ブナは高木になるのですが、ここのブナには成長限界が見られます。さらに、種子の発生量が少なく、幼木を見かけることも少ない状況です。加えて昨今の温暖化により今後もこの生態が維持されるかには不安があります。

○御岳のミズナラ林

ミズナラは御岳にだけ見られ、北東又は西南の海拔900mから山頂にかけて植生しており、ブナとともに南限植生地に育った温帯植物の代表樹種の一つです。

本来、高木となるミズナラですが、南限という不利な環境（本来より低温な地域に生息する）から8m未満になっていますが、種子放出は豊かで幼木も育っているようです。

○人類の宝とよばれた樹林

1974（昭和49）年5月16日、国際植生学会日本大会の折に、世界各国の植物学者54人と鹿児島大学田川日出夫教授ら日本人学者23人がバスで高隈山のイス原生林を視察調査し、「世界の貴重な宝」だとして原生林の保護を訴えました。この模様は全国に報道され、「高隈山の照葉樹林」の名を全国に広めました。

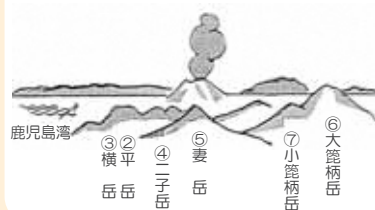
高隈山の7つの峰

高隈山は1,000mを超す7つの峰が連なっています。

- ①御岳（おんたけ）
- ②平岳（ひらだけ）
- ③横岳（よこだけ）
- ④二子岳（ふたごだけ）
- ⑤妻岳（つまだけ）
- ⑥大箆柄岳（おおのがらだけ）
- ⑦小箆柄岳（このがらだけ）

この7つのうち最高峰はどれでしょう？

御岳頂上から見た6つの峰



答え

- ⑥大箆柄岳（1,237m）：最高峰
- ①御岳（1,182m）
- ⑦小箆柄岳（1,149m）
- ⑤妻岳（1,147m）
- ④二子岳（1,107m）
- ②平岳（1,102m）
- ③横岳（1,094m）



高隈山



ブナの実



ツクシアケボノツツジ



スズタケ



ホソバシュロソウ



シコクママコナ

とまのがわ

苫野川水系のカワゴロモ

カワゴロモは、石の表面を覆う衣のような植物で、苔類や藻類によく似た形状をしています。カワゴロモは花を咲かせるので、サクラと同じ被子植物です。緑色の衣は根が変形したものと考えられており、根の上に花ができます。退化した葉はありますが、茎に相当する軸状の器官はありません。葉は根の内部からつくられています。

このように、独特な形状をしているカワゴロモは、南九州にのみ生育する植物で、本県のレッドデータブック（RDB）では準絶滅危惧に選定されています。

肝属川水系では、苫野川でのみ確認されていて、肝属川では1954（昭和29）年の調査によって1950年頃までに絶滅したものとされていたが、1990（平成2）年の調査によって、上流の苫野川に生育しているのが確認されています。

017

鹿屋市の植物

鹿屋市の植物は、本市の中部から北部へ広がる高隈山系に広く自生しており、高隈山の植生を知ることで、本市の植物について理解できます。

高隈山地は山々が連なっており、北部の山々に比べて比較的暖かく、雨量は北部と同様に多いため、植物がよく育成し種類も豊富です。ここでは、本市の植物の中でも、1,300種以上の植物が生息するとされている高隈山の自然植物について紹介します。

まず、高隈山の植生を標高ごとにみていきます。

低標高域にはスダジイやタブノキ、イスノキ、ウラジロガシ、ヤブツバキ、アオキなどが分布します、中標高域にはサカキ、シキミ、サザンカなど常緑広葉樹が広く分布しています。

1,000m前後の比較的高標高域にはブナ（南限）やカナクギノキ、ナツツバキなどの落葉広葉樹が、イヌガシやアセビなどの常緑広葉樹と混生しています。

場所ごとにみていくと、大笹柄岳や御岳山頂付近ではリョウブやマンサクなどの低木林が見られます。また、大笹柄岳～小笹柄岳の稜線沿いにはスズタケが密生し、林床に実生や草本種はあまり見られません。御岳の北東尾根では、オオマルバノテンニンソウが林床に群落を形成しています。高隈山を縦断する九州自然歩道では、希少種であるホソバシュロソウ（本県レッドデータブック（RDB）：絶滅危惧 類）、シコクママ



タカクマミツバツツジ



タカクマヒキオコシ



タカクマホトトギス



カワゴロモ



高須川の様子

写真提供：鹿児島県立博物館
写真提供：野の花ひとりごと ステラ

コナ（本県RDB：絶滅危惧 類）、本県では大隅半島でのみ見られるツクシアケボノツツジなどが見られます。他にも、タカクマミツバツツジ（本県RDB：絶滅危惧 類）、タカクマホトトギス（本県RDB：絶滅危惧 類）、タカクマヒキオコシ（本県RDB：準絶滅危惧）などの『高隈』の名を冠した固有種も見られます。

地質学的な視点で高隈山をみると、今から約1万年前に氷河期が大隅半島に達した時代に、それまで日本本土に分布していたブナなどの落葉広葉樹が大隅半島まで南進してきたため、ブナやミズナラなどの南限種が多く見られます。また1万年もの間、他の地域と隔離された状態にあるため、生息する植物は遺伝的な多様性を保存する上でも重要な地域となっています。

このように、高隈山は多くの貴重な植物が生息し、落葉広葉樹の南限になっていたりと、遺伝的にも重要になっていたり、学術的に非常に重要な自然を有しており、まさに、植物の宝庫といえます。

このほか、鹿屋市南部にある吾平地域には、^{とまの} 吾野川のカワゴロモ（鹿屋市指定文化財）やヤッコソウ（神野地域）などが自生しています。ヤッコソウは、ヤッコソウ科の1年生の寄生植物で、シイ属の植物の根に寄生します。10月から11月に、高さ7cmの^{かけい}花茎を出します。この形が江戸時代の「奴」の姿に似ていることから、この名前がついています。

たかすがわ

高須川水系のカワゴロモ

鹿屋市では吾野川だけではなく、高須川でもカワゴロモの生育が確認されています。高須川におけるカワゴロモの分布は広範囲に及び、飛び石のように数十mから時には数百mも離れて点在しています。生育環境については、水深0.1～0.5mにある凝灰岩の表面に附着していることが多く、平均0.64m/sの水流の中で生育しています。

高須川は河積が狭小であり、河道の蛇行が甚だしく、流下能力も不足しており、幾度となく浸水被害が発生しているため、現在も河川を改修中です。カワゴロモが生育している河川環境を保全・継承するため、関係機関や地域住民との連携を図り、河川の多様性を意識しつつ、治水・利水・環境に関する施策を行っています。吾野川・高須川とともに、今後もカワゴロモが生育できる環境を保っていくことが大切です。



タカクマホトトギス



タカクマヒキオトシ



タカクマミツバツツジ



リンドウ



ツチトリモチ



オオマルパノテンニンソウ

おおが 串良の大賀ハス



大賀ハスは、2000年以上昔のハスの実から発芽・開花させたもので古代ハスとも呼ばれています。1951（昭和26）年、大賀一郎博士の手によって1粒の発芽、そして開花に成功しました。大賀ハスは2000年以上自然交配されていないことが植物学的にも大変価値があります。串良地区で株分けによって大切に育てられています。（串良総合支所の駐車場前で見られます）

018

鹿屋市の野草

鹿屋市の野草は、地形的、気候的にみて植生が非常に豊かであり、昔から多くの人々が植物研究に訪れ、植物名にこの地方名を冠したものが多くも特徴です。それは、以下のとおり5つのグループに分けることが出来ます。

大隅に特産する種及び県下唯一の産地である植物大隅半島はカシヤシイの常緑広葉樹で特徴づけられる暖温帯常緑広葉樹林であり、地形、地質、地史また気候要因によって分化したと考えられる特産種も多くみられます。

キュウシュウイノデ、クワノハエノキ、ミトガンピ、タカクマミツバツツジ、ヒロハドウダンツツジ、ヘツカコナスビ、タカクマムラサキ、オカウツボ、サイゴクガマズミ、タカクマソウ、ウラジロノギク、タカクマザサ等

西南日本の太平洋型要素

近畿地方南部や中国地方の瀬戸内海斜面および四国との共通種です。

イヨクジャク、オオチャルメルソウ、ヒメシャラ等
北方系要素

サハリン、千島から南下した高山や亜寒帯系の要素で北海道や本州を経て南下したと考えられている種です。

イヌガンソク、ハルニレ、コウモリカズラ等



アケビ（つるを薬用）



サルトリイバラ（根茎を薬用）



イタドリ（根茎を薬用）



ジュズダマ（種子や根を薬用）



ヒガンバナ（鱗茎を薬用）

写真提供：鹿児島県立博物館

大陸系要素

中国北部、東北部、朝鮮半島と共通に分布し、中部内陸や瀬戸内海などの大陸的気候を示す地域を中心に分布するものです。

イヌガヤ、サンショウソウ、ツメレンゲ等

南方系要素

南西諸島、台湾、南中国やマレーシアの南方系要素に富み、大隅を北限とする種も多いようです。

ヘゴ、ヤッコソウ、カワゴロモ、ソテツ等

○漢方薬としての野草

鹿児島県薬剤師会の現地調査によると、鹿屋市では高隈溪谷において19種の薬草を確認しています。

[高隈溪谷（1989（平成元）年9月）]

ウツボグサ・キンミズヒキ・イタドリ・ゲンノショウコ・イワタバコ・ウラジロガシ・ジュズダマ・ヨモギ・オナモミ・アカネ・ヒガンバナ・イノコズチ・ヘクソカズラ・クズ・ムベ・サルトリイバラ・アケビ・ピナンカズラ・アキグミ

野草の漢方薬としての使用は危険を伴うので、信頼のおける文献での確認や専門家の指導の下で採取等を行ってください。

水生植物



○ショウブ

玉泉寺児童公園などに、見られます。玉泉寺公園内にはツツジ、フジ、ショウブなど、四季折々の花が美しく咲いています。



○ヒメガマ

高さ1.5mほどで休耕田などに群生する大型の多年草。葉は幅1cmほどで約2cmあるガマより細かたい。直径15mmほどの円柱状の雄花群と、それより上につく長さ15cmほどの雌花群との間には、5cmくらい緑色の花序軸が見えます。



写真提供：
オオタカ保護基金

クマタカ
(絶滅危惧 類)



写真提供：
鹿児島県立博物館

ミサゴ (準絶滅危惧)

カモの種類

日本には約50種のカモ科に属する野鳥が生息しています。カモ科には椋鳩十氏の童話「大造じいさんとガン」に登場するガンやハクチョウも含まれ、日本の湖や川などで多く見られる野鳥の仲間です。鹿屋市でも大隅湖や各河川でマガモやカルガモ、オシドリなど多くのカモ科の野鳥を見ることができます。

カモといえば、茶色の羽毛で「地味な鳥」というイメージですが、オスだけ季節によって装いが変化します。夏から秋の羽衣を「非生殖羽」(= エクリプス) といい、秋から冬の羽衣を「生殖羽」と呼びます。オスは繁殖期になると、メスへのアピールのために羽毛が派手になります。



マガモの生殖羽



マガモの非生殖羽

019

高隈山の野鳥や動物

鹿屋市に生息する野鳥や動物は、高隈山に主に生息しており、全て網羅できることから、高隈山林野庁により、森林生物遺伝資源保存林に制定され、多くの野鳥や動物が生息しています。

野鳥に関しては、80種類以上生息しているといわれていますが、26科43種が鳥類調査によって報告されています。

これらの野鳥は、自然環境によって生息域が異なり、山間部では鹿児島県のレッドデータブックにおいて絶滅危惧 類に選定されているクマタカや、準絶滅危惧に選定されているコシジロヤマドリなどの希少なことから、ウグイスやシジュウカラ、メジロ、キジバト、ヒヨドリ、アマツバメなどの野鳥が観察できます。

大隅湖周辺では、準絶滅危惧に選定されているミサゴをはじめ、カワセミ、ヤマセミ、オシドリ、カイツブリ、アオサギ、オオバンなどの野鳥が観察できます。

特定外来生物に指定されているソウシチョウも確認されており、高隈山の生態系に影響を与えることが懸念されています。

動物に関しては、絶滅危惧 類に選定されているヤマネや絶滅危惧 類に選定されているスミスネズミなどの希少なことから、ニホンザルやキュウシュウノウ



コガタブチサンショウウオ
(準絶滅危惧)



カワムツ

< 特定外来生物 >



ソウシチョウ

写真提供：鹿児島県立博物館



大隅半島のヤマネ (メス)



ヤマネの冬眠姿勢

写真提供：船越公威 (鹿児島国際大学)

サギ、ホンドテン、ニホンイノシシ、キュウシュウジカ、ニホンアナグマ、ホンドタヌキなどが確認されています。

また、浅く水が溜まっている様な沢には絶滅危惧類に選定されているコガタブチサンショウウオなどの両生類が生息していたり、肝属川の上流域から中流域の瀬にオイカワ、流れがよどみ深くなった場所にはカワムツ、水際の緩流部にはメダカなどの魚類が生息しています。

大隅湖では、特定外来生物に指定されているオオクチバスが生息しており、県内外から多くの釣り人が訪れているものの、肉食で魚類、両生類などを多岐にわたり捕食するため、生態系への影響が懸念されています。



アナグマ



イノシシ



サル



タヌキ

高隈山で確認される動物

水鳥とは

海洋、河川、湖沼などの水域とその水辺を主な生活空間とする鳥の一般的な呼称です。

ラムサール条約(1)では、「生態学上湿地に依存している鳥類」と定義されており、主に湿地や干潟などの水辺に生息する鳥類を指して使われるようです。

対象となる鳥類はアビ目、カイツブリ目、ペリカン目、コウノトリ目、カモ目、ツル目、クイナ目、チドリ目です。中でも渡り性の水鳥は個体数の減少が報告されており、原因として越冬地・繁殖地の減少や環境悪化があげられています。

- 1 特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地及びそこに生息・生育する動植物の保全を促し、湿地の適正な利用を進めることを目的として、1971(昭和46)年2月2日、イランのラムサールで開催された「湿地及び水鳥の保全のための国際会議」において採択されました。



戦車橋近くの公園



左はカワムツ、右はギンブナ。きもつき川水辺館では、肝属川に生息する生き物が見学できます。

湧水について

鹿屋市内は、笠野原台地を抱え不毛の台地と古来から言われてきましたが、実は、その台地はシラスひもこでできているため、台地の麓では、沢山の湧水(湧き水)ポイントがあります。特に趣のある場所が高隈地域にある「観音淵」です。シラスをドーム状にくりぬいたような洞窟の奥と両脇からこんこんと湧き水がでてきており、地域の方々は、飲料水としても利用されるほどきれいな水が湧き出しています。

また、串良町細山田の戦車橋近くでは、湧水が出る場所に、公園が整備され乳幼児や園児など小さい子供たちの水遊び場にもなっています。吾平町神野地区や吾平山上陵脇からも水が湧き出しており本市域はとても豊富で、きれいな水があります。

020

川や海の生き物

○川の生き物

私たちの住む鹿屋市で一番大きな川は、一級河川の支流が流れ込む肝属川です。ここには約50種類の魚が住んでいます。私たちの近くの川にどんな生き物がいるか紹介していきます。

まずは、カワムツ(コイ目、コイ科)。上・中流に生息し、昆虫を好んで食べます。目の後ろから尾ヒレにかけて黒い帯のような線が特徴です。次にギンブナ(コイ目、コイ科)。中・下流に生息しています。よくコイと間違われますが、コイと違ってヒゲはありません。オイカワ(コイ目、コイ科)。上・中・下流のすべてで見ることができ、肝属川でいちばん多く見られる魚です。産卵時期には、オスは体が赤や青の美しい色になります。

多種多様な生き物が住んでいる肝属川ですが、流れる水は残念ながらきれいとは言えません。よごれの原因は、家庭からの雑排水や、農畜産等といわれています。鹿屋市では、肝属川の水質浄化活動の推進に取り組んでいます。みんなで協力し、肝属川をきれいな川にしていましょ。

○海の生き物

鹿屋市の海の魚が最も良く釣れる場所として知られ



産卵場所が満潮時、海に浸かる可能性のある場所であったため、ウミガメ保護施設カメのゆりかごへ移設します。

浜田海水浴場と高須海水浴場のウミガメ

鹿屋市は、ウミガメが上陸・産卵する全国でも有数の海岸を持っています。ウミガメにはアカウミガメ・アオウミガメなどがいますが、鹿屋市への上陸が確認されているのはアカウミガメです。アカウミガメは雑食性でクラゲやイカ、カニなどを食べて生活しています。

鹿児島県のレッドデータブックで絶滅危惧 類に指定されており、その保護が求められる動物種で、県はウミガメを守るために「鹿児島県ウミガメ保護条例」を制定し、県内全域、無断でウミガメを捕獲したり、卵を採取したりすることを禁止しています。

本市では、地元住民、ウミガメ保護監視員と協働で、アカウミガメの保護活動を毎年で実施しています。ウミガメは非常にデリケートな生き物で、上陸する海岸が汚れていたりすると産卵することが出来ません。ウミガメが安心して産卵できるように、ご協力をお願いします。

るのは、船間町の海岸部や天神町の天神鼻・ニツ島そして、古江漁港周辺です。様々な魚が釣れるので、大勢の釣り人で休日は賑わっています。また、家族づれにおすすめな釣り場は、天神鼻周辺です。どこで何が捕れるか主な魚を紹介します。船間町の海岸部や天神町の天神鼻・ニツ島では、四季を通してイシダイやミズイカ・アラカブが釣れます。また、古江漁港周辺では、年間を通してチヌが狙えます。

○鹿屋市の主な水産物

鹿屋市は豊かな漁場である鹿児島湾（錦江湾）に面しており、小型底曳網漁業の漁船漁業も行われていますが、カンパチなどの養殖が盛んで、水揚量全体の9割以上を占めています。令和3年度に鹿屋市漁協に水揚された上位5魚種ですが、1位から4位までを養殖魚が占めています。このほかには、ヒメアマエビ、シマアジなどが水揚げされています。

令和3年度鹿屋市漁協水揚量

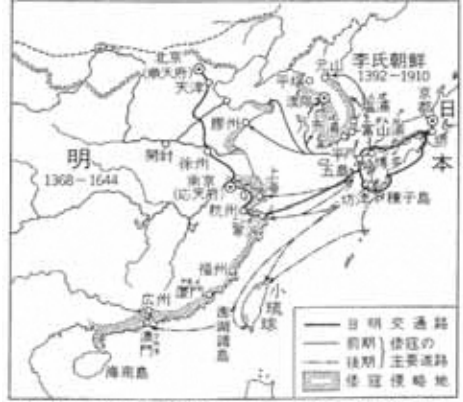
順位	種類	水揚量 (t)
1	カンパチ	3,636
2	ヒラマサ	512
3	ブリ	351
4	ブリヒラ	31
5	ヒジキ	18

鹿兒島城下の湊の賑わい



(「鹿兒島城下絵巻図(部分)」鹿兒島(国立美術館蔵))

14世紀頃の東アジア



「歴史46 鹿兒島県の歴史」山川出版社 1999年より

古代の交通

鹿屋市域の古代の交通の主流は、海や川を使った海上交通が主でした。古くから海上交易によって奄美諸島や沖縄・中国・朝鮮半島と密接に結ばれ、それを示す地名や遺物が近隣の町や本市に残っています。

地名

東串良町とうじんの唐仁町

鹿屋市高須町の唐仁町

遺物

串良町岡崎18号古墳出土の鉄錠

肝付町塚崎古墳群出土の貝輪かいわなど

中世になると応仁の乱後に遣明船が大内氏の領域外を通るようになったため、日明貿易も盛んに行われるようになりました。この頃には、倭寇わこうも古江や根占、波見、柏原の港を拠点に活発な活動を始めます。倭寇は、中国人集団だったと言われています。

021

鹿屋市の交通の歴史

○藩政時代の交通

近世の鹿兒島藩では外城制度による行政区分がなされ、城下113（数字は時代によって若干異なる）の外城（のちに郷と改称）からなっていました。郷には藩直轄地と有力家臣の一所地の私領じとうがあり、地頭（鎌倉時代の役職とは別で、鹿兒島藩特有の直轄地を治める役人の名称）や領主等が政務をとるかりや仮屋が行政の中心として置かれ、多くはその周辺に郷土むちとが集住する麓が形成され、その近くに野町や浦町が形成されそれらを繋ぐように道（街道）が造られました。鹿屋市地域では、大隅の主要な6街道の内、4街道が通っていました。

○4つの街道とは

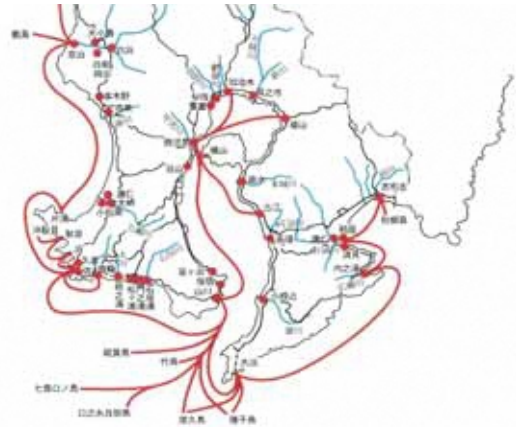
- ・ 鹿屋筋
福山郷-牛根郷-垂水郷-新城郷-花岡郷-鹿屋郷
- ・ 佐多筋
花岡郷-大始良郷-大根占郷-小根占郷-佐多郷
- ・ 内之浦街道
鹿屋郷-大始良郷-始良（吾平）郷-高山郷-内之浦郷
- ・ 志布志筋
鹿屋郷-串良郷-大崎郷-志布志郷

近世の街道は、郷支配の中心となる仮屋やその周辺

街道と麓・町場・湊等の関係

郡	麓	野町	湊町	主な湊・湊	城壁と山麓の関係	麓と町場の関係
海山郡	○	—	○	海山湊	—	隣接
串良郡	○	—	—	牛額(入船)湊跡	—	—
鹿水郡	○	—	○	鹿水湊	当初は鹿水城跡内	隣接
新城郡	○	—	—	新(船尾)城跡	—	—
花岡郡	○	○	—	古江湊	水谷城跡	山内内
鹿屋郷	○	○	○	高須湊	鹿屋(高須)城跡	野町と隣接
大始良郡	○	—	—	—	大始良城跡	—
松山郡	○	○	—	—	山古城跡	隣接
大根古郡	○	—	—	—	—	—
寺崎古郡	○	—	○	額古湊	—	隣接
佐多郡	○	—	—	伊座敷湊・大泊湊	佐多(伊座敷)城跡	—
田代郡	○	○	—	—	田代(藤尾)城跡	隣接
内之浦郷	○	—	○	内之浦湊	—	隣接
高山郷	○	—	○	波見湊	行張城跡	野町と隣接
串良郷	○	○	○	相原湊・唐仁湊	串良(鶴島)城跡	野町と隣接
大根郷	○	○	—	—	大根城跡	隣接
志布志郷	○	○	—	志布志湊	志布志(内)城跡	隣接
松山郷	○	○	—	—	松山城跡	隣接(並行)
末吉郷	○	○	—	—	当初は末吉城跡内	隣接

近世の湊と航路、町場(浦町)の分布状況図



地理

に形成された武士の集住地である麓、町場(野町・浦町)と海上交通の拠点である湊を結んでいます。

花岡郷(花岡町)は、花岡島津家の私領で領主は旧鶴羽小学校に仮屋を置き周囲に麓が形成され、海岸部の古江浦から鹿児島城下と肝属地域を結ぶ主要航路とされていました。古江浦町付近に野町もでき、鹿屋筋が通っていました。

鹿屋郷は、鹿児島藩直轄地で、地頭仮屋は鹿屋城(現在の城山公園)近く(旧市役所跡リナシティかのや付近)に置かれ、古前城や打馬地域に麓が形成され仮屋の南側に野町が形成されました。海岸部の高須川河口に飛地があり、浦町がありました。麓・野町に接して志布志筋があり、海岸部の浦町を佐多筋が通っていました。

大始良郷・始良(吾平)郷も直轄地で大始良城跡の北側に、吾平は、吾平小学校下の吾平総合支所付近に麓が形成され、これに隣接するように内之浦街道が通っていました。

串良郷もまた直轄地で、仮屋は現在の串良小学校と串良総合支所付近に置かれ麓が周辺に形成されました。また、野町と浦町は、現在の東串良町の豊栄野町、柏原浦町・唐仁浦町にあたり、これらを通して、志布志筋やその他の街道が通っています。

ろくさいいち
にぎやかだった六斉市

鹿屋郷の野町で立つ六斉市は鹿児島・川内とともに藩政時代の三市と言われ賑わいを見せていました。現在は、かつての六斉市に代わって毎週土曜日に朝市がリナシティかのや駐車場で行われ、近隣住民等が多く訪れています。

六斉市とは、中世から近世にかけて、1か月に6回開かれた定期市。



現在の土曜朝市



大隅縦貫道串良鹿屋道路

東九州自動車道（鹿屋串良JCT）



大隅線の整備そして廃止

大隅半島の東西沿岸部を結ぶ鉄道の建設は、1915（大正4）年南隅軽便鉄道が高須～鹿屋間を開業したのが始まりです。翌年には大隅鉄道と社名を変更し、大正時代には路線の東側は古江、西側は高須まで延伸されました。その後、1935（昭和10）年に国に買収され串良～高須間を古江線とし、同年に志布志～東串良間の古江東線が延伸開業し、古江線は古江西線と改称され、翌年には東串良～串良間が延伸開業、その後、志布志～古江間が1本の鉄路となり古江東西線を統合して古江線となりました。

また、古江から国分方面への開業により、路線名を大隅線としました。

1915（大正4）年7月14日に開業し、1972（昭和47）年9月9日に路線総延長（98.3km）を全通させ、駅数は33駅ありましたが、車社会の到来で鉄道離れが進み、15年後の1987（昭和62）年3月14日全線廃止となりました。

022

交通と運輸

鹿屋市の公共交通は、路線バス、鹿児島空港行き空港連絡バス、一般乗用タクシー、コミュニティ交通（コミュニティバス（くるりんバス）、かのや市乗合タクシー）です。

路線バスの運行は、中心市街地にある鹿屋バス停留所を交通結節点に、大隅半島の各市町の行政施設や商業施設・医療福祉施設等を結び、放射状に大隅半島全域へネットワークを形成しています。

また、鹿児島市のマリポートかごしまに寄港した外国のクルーズ船の乗客が、小型高速船で鹿屋港を訪れるなど、鹿屋港を活用した取組も始まっています。

一方、昭和40年代初めに要望活動が始まった「東九州自動車道」は、1973（昭和48）年から整備が始まりました。そして、東九州自動車道「鹿屋串良～曾於弥五郎間」と、その道路とつながる高規格道路大隅縦貫道「鹿屋串良～笠之原間」が2014（平成26）年12月21日に開通、続いて、東九州自動車道「鹿屋串良～志布志間」が2021（令和3）年7月17日に開通し、鹿屋市から九州各地への移動時間が短縮されました。これらのことにより、九州各地と大隅地域が結ばれ、交通混雑の緩和、輸送時間の短縮・コスト削減が図られ、畜産業の更なる活性化や大規模災害時の避難道等の効果が期待されています。

コミュニティバス（くるりんバス）



大隅半島直行バス



○東九州自動車道と大隅縦貫道

「東九州自動車道」は、北九州市を起点に大分県、宮崎県を経て、鹿児島市に至る延長約436kmの高速自動車国道です。本路線は、九州縦貫自動車道及び九州横断自動車道とともに九州の高速道路ネットワークを形成し、東九州地域の産業・経済・文化の振興と均衡ある発展を図り、また、交通混雑の緩和、輸送時間の短縮など沿線都市の生活向上・活性化に資するために計画されたものです。2021（令和3）年7月には、鹿屋串良JCT～志布志IC間が開通し、鹿屋市内における整備は完了しました。

一方、「大隅縦貫道」は、東九州自動車道鹿屋串良JCTから鹿屋市、肝付町、錦江町を経て南大隅町に至る延長約53kmの高規格道路です。東九州自動車道と一体となって大隅地域の広域交通ネットワークの形成を図る重要な路線です。6次産業の推進、輸送コストの縮減や飼料の安定供給による農林水産業の活性化、企業誘致や新たな雇用創出、観光を軸とした地域活性化、第2次救急医療施設への搬送時間が短縮され救命率の向上が図られます。また、異常気象による豪雨災害などに対応する安全・安心な道路の確保、国道269号や国道448号の災害時の代替え道路として防災のダブルネットワークが図られます。

市民の移動手段

鹿屋市の路線バスは、1930（昭和5）年から運行が開始されています。1987（昭和62）年に鉄道が廃止されて以降は、路線バスや自動車が移動手段の中心となりました。「鹿屋バス停」を中心に、大隅各市町や市内各方面へ路線バスが運行され、人々の移動を支えています。

また、鹿屋市が運行を委託しているコミュニティバス（くるりんバス）は、2007（平成19）年9月に運行を開始して以降、エリアを広げ、鹿屋、輝北、串良、吾平地区で16路線が運行されています。

この他、鹿児島中央駅と鹿屋を結ぶ直行バスは、大隅地域の利便性の向上や交流人口の増加を促進するため、2009（平成21）年12月から運行されています。

バス以外にも、かのや市乗合タクシーや社会福祉協議会がコーディネートするドライブサロンなど様々な移動手段があります。

霧島ヶ丘公園



子供広場

霧島ヶ丘公園



コスモスと夕日

公園の話

公園には小規模なものから大規模なものまであり、小中学生の頃友達と遊んだ公園、遠足などで大勢で行った公園、大人になってから行くようになった公園など、皆さんそれぞれ思い出があると思います。

ここで、公園の種類等について紹介します。

公園には法律で定められた都市公園のほか、市の条例で定められた市立公園や健康ふれあい運動広場、農村運動広場などがあります。

また、都市公園の中でも霧島ヶ丘公園は総合公園（休息、鑑賞、散歩、遊戯、運動等総合的な利用を目的とする）、平和公園は運動公園（主として運動することを目的とする公園）など、その機能・目的により区別されています。

このように、公園には様々な種類があり、皆さんに一番なじみのある公共施設といえるのではないのでしょうか。

023

鹿屋市の公園

皆さんが、遊んだり、運動したり、休憩したりするときに使える公園が、鹿屋市には全部で119カ所あります。（2022（令和4）年4月1日現在）

ここでは、代表的な公園を紹介していきます。

○霧島ヶ丘公園

1986（昭和61）年4月に開園した霧島ヶ丘公園は、鹿屋市街地から南に約7kmのところのところに位置し、標高が約160mで、公園全体がなだらかな丘陵地となっています。ひまわりやコスモス、チューリップなど、四季折々の花が楽しめるほか、展望台からは、鹿児島湾や桜島、開聞岳など鹿児島の代表的な自然が眺望できる絶好のロケーションが魅力です。

また、大型遊具やゴーカートなど子供向けの施設から、キャンプ場やサイクリングコースなど、大人もアクティブに楽しめる施設まで幅広く充実しているほか、黒豚グルメやテイクアウトができる飲食店もあります。

公園内の「かのやばら園」は、春（4月下旬～6月中旬）と秋（10月下旬～11月）に見頃を迎え、例年この時期に「かのやばら祭り」が開催され、様々なイベントが行われます。[項目086参照]

平和公園



串良平和アリーナ

鹿屋海浜公園（浜田海水浴場）



海岸と松林

○平和公園、平和記念公園、平和桜並木公園

かつて海軍航空隊串良基地があった場所が今では公園になっています。この公園の東西1,300m、南北1,200mの直線道路は、1945（昭和20）年3月1日から終戦までの半年間に多くの若者が飛び立った滑走路でした。現在は両脇に桜の木が植えられ、3月末から4月初旬にかけて桜の名所となっています。

平和記念公園内には、串良基地から出撃し命を落とした特別攻撃隊363名、一般攻撃隊210名の方々の御霊を祀る慰霊塔が建てられています。また、公園周辺には串良平和アリーナなどのスポーツ施設が設置されています。

○鹿屋海浜公園

この公園は市街地の西南に位置し、鹿児島湾に面した公園です。海岸沿いは、樹齢100年を越える松林が続く白砂青松はくしゃせいしょうの砂浜です。また、鹿児島湾を隔てて開聞岳や桜島も一望できます。海辺へは木製スロープが松林の間を縫うように設置しており車椅子でも行けます。

夏場は夏季観光施設として松の木陰でゆったりと休憩できて、遠浅の海岸で安心して泳ぐことのできる海水浴場やキャンプ場として開放され県内外から多くの利用者で賑わっています。また、海岸は全国でも有数のアカウミガメの産卵地として知られています。

城山公園と北田の湧水

この公園は、中心市街地に位置する鹿屋城（亀鶴城）跡の公園です。ここはかつて鹿屋氏や伊集院忠棟、島津相模守久信らの居城でした。いじゅういんだむね しまづさがみのかみひさのぶ 山城であった城山も今は開発が進み空堀を残すのみですが、その歴史的な価値は高いものです。山頂城跡の展望台からは市街地を一望のもとに見渡せます。公園の基底からは今も豊富な地下水が湧き出しています。かつてはこの湧水を利用したプールが市民に親しまれていましたが、現在は日本庭園がつけられ、市民の憩いの場となっています。

また、山頂公園一角には「鹿屋小唄」かのやこうたを作った野口雨情のぐち（童謡）「シャボン玉」作詞）の詩碑が建てられています。

[項目067参照]



鹿児島黒牛



黒豚

鹿屋市のブランド鶏

鹿屋市では、通常の肉用鶏（ブロイラー）の他に、シャボーン鶏やさつま地鶏、黒さつま鶏、日本キジといったブランド鶏が生産されています。

ブランド鶏は、食感や味わいなどの特徴をそれぞれ持っており、普段食されている鶏肉とは異なった感覚を楽しむことができます。

一方で、生産数も少数であり、鹿屋市内でも限られた農家のもとでしか生産されていません。

このような希少価値の高いブランド鶏は、一部の飲食店や農家が運営している販売サイト等で販売されています。鹿屋市のブランド鶏を、ぜひ味わってみてはいかがでしょうか。

024

鹿屋市の畜産

鹿屋市の畜産業は、温暖な気候と豊富な自然、広大な大地を活かしながら発展してきました。

肉用牛・乳用牛・養豚においては、鹿児島県で1位の飼養頭数を誇っており（2021（令和3）年2月現在）、県内有数の畜産地帯となっています。また、全国市町村農業産出額ランキングにおいて、第9位2019（令和元）年に位置する本市の農業産出額のうち、約75%を占めるなど、基幹産業として鹿屋市を支えています。

○肉用牛

鹿屋市の肉用牛経営は、畜産業が生み出す農業産出額のうち、約半分の割合を占めるなど、本市畜産業の中心的な役割を果たしています。また、肉用牛の農業産出額では、全国第2位2019（令和元）年の数字を残しており、全国トップクラスの肉用牛産地となっています。

さらに、5年に1度開催され「和牛のオリンピック」とも称される「全国和牛能力共進会（コラム参照）」においても、鹿児島県代表として、本市から多く出品され、活躍をしています。



黒さつま鶏



乳用牛（ホルスタイン）

このように、経営規模を広げ、実績を積み重ねてきた鹿屋市肉用牛経営は、今後更に知名度を広げ「和牛のふる里かのや」のブランド確立に向けて進み続けています。



○養豚

鹿屋市は肉用牛と同じくらい養豚も盛んな地域であり、鹿児島県内でもトップクラスの養豚地帯です。

なかでも品種や与えるエサなど厳密な基準で育てられ、厳選された豚肉である「かごしま黒豚」を生産している養豚農家も多数あり、「かごしま黒豚」生産の中心地になっています。

また、鹿屋市には地元のブランド豚が多く存在し、中でも、希少豚であるサドルバック種と在来種を交配させた「幸福豚」は、赤身の多さと柔らかさを併せ持っています。一方、輝北町で育てられたごく一部の白豚だけに認められる「輝北スターポーク」は、肉に旨みと甘みが凝縮され、風味があり、しゃぶしゃぶにしてもアクが出にくいなど特徴があります。

このように、鹿屋市では、養豚農家の高い技術と愛情が込められ、高品質な豚肉が生産されています。

「全国和牛能力共進会」とは

「全国和牛能力共進会」（通称：和牛オリンピック）は、1966（昭和41）年に岡山県で第1回大会が開催されました。日本全国から優秀な和牛を集め、改良の成果や優秀性を競う大会です。審査は、種牛の体型の良さなどを審査する「種牛の部」と肉質を審査する「肉牛の部」があります。この大会で優秀な成績を収めることで、和牛ブランドの向上に大きくつながることから、和牛関係者にとって最も重要な大会と位置づけられています。

1970（昭和45）年の第2回大会は鹿児島県で開催されています。2017（平成29）年に行われた第11回大会（開催地：宮崎県）では、鹿児島県が総合優勝を果たしており、鹿屋市からも7頭出品され、日本一に大きく貢献しました。そして、2022（令和4）年の第12回大会は、鹿児島県が全国初となる2回目の開催地となりました。



機械化されたばれいしょの収穫作業



農業用ドローンの活用による省力化

米の品種

鹿屋市で栽培される米の品種を紹介します。

3～4月に田植えをして、7～8月に収穫する早期米は「コシヒカリ」、「イクヒカリ」、「なつほのか」等があります。

6月に田植えをして10月に収穫する普通期米は「ヒノヒカリ」、「あきほなみ」等があります。

飼料用米（WCS）は「タッチアオバ」等が作られており、5月に田植えをして、9月に収穫します。

各品種は、田植えの時期をずらしたり、地域ごとに同品種を作るなどして交雑が発生しないように配慮されています。

米にまつわる伝承

江戸時代に薩摩藩が編纂した三国名勝図絵には、古代の神話にまつわる史跡として、吾平町の水田地帯にある飴屋敷が紹介されています。

また、奈良時代に編纂された大隅国風土記では、大隅の風習として、米を口噛みして醸す、口噛みの酒が記載されています。

025

鹿屋市の農業

鹿屋市では土地利用型の農業が盛んで、さつまいも、茶、ごぼう、ブロッコリー、キャベツ、だいこん、にんじん、水稻等が栽培されています。ピーマン、きゅうりは、県のブランド指定を受け市場から高い評価を受けています。ここでは、その一部を紹介していきます。

○水田農業

鹿屋市の水田は、シラス台地の間を流れる大小の河川の水系に沿って存在し、山間部には谷田や細山田等の地名を有する小規模な水田地域があります。肝属川とその支流である串良川や始良川の下流域にある肝属平野は、県内でも有数の水田地帯です。

肝属平野では、江戸時代から、堰や水路等のかんがい施設が整備され、明治以降の耕地整理や、ほ場整備事業による大区画化により、効率的な水田営農が行われています。

現在米は、鹿屋市の農業産出額で「さつまいも」に次ぐ第2位となっています。食生活の多様化や人口減により、主食用米としての需要が減少しているため、全国有数の規模を誇る畜産業と連携した飼料用米（WCS）や、お菓子や酒類の原料としての加工用米の作付けにより、水田基盤の維持が図られています。

近年では、スマート農業機器も導入されつつあり、ドローンによる薬剤散布に取り組むなど、一層の省力化が図られています。



ハウス栽培ピーマン
(かごしまブランド)



かのや紅はるか

〇畑作農業

鹿屋市の畑作は南九州特有の地形であるシラス台地のうち、最も広い笠野原台地を中心に行われています。笠野原台地は、戦前まで、水源の確保が困難であることや、土壌の保水力が低いことから、農業経営が安定せず、乾燥に強いさつまいも等の限られた作物しか作られていませんでした。

戦後、食料増産のため、国営笠野原畑地かんがい事業が実施され、高隈ダム等の施設が整備されたことで、水源が確保され、野菜や飼料作物の安定生産が可能となりました。

また、吾平地区や鹿屋市南部を対象地とする肝属中部地域においても、荒瀬ダムの完成により、2018（平成30）年から一部通水が始まっており、更なる営農の展開が期待されています。

現在の鹿屋市の畑作における農業産出額の上位5品目は、「甘藷」、「ばれいしょ」、「ピーマン」、「茶（生葉）」、「にんじん」の順で、桜島の降灰による影響から、いも類・根菜類の栽培が盛んです。施設園芸では、鹿児島県のブランドであるピーマンが吾平、串良地区を中心に栽培されており、近年では、環境制御装置の導入により、収穫高の向上が図られています。

茶も笠野原台地や鹿児島湾沿岸部を中心に栽培されています。

かのや紅はるか

焼酎用やでん粉用が主流の鹿屋市で、青果用さつまいもとして取り組まれているのが、「かのや紅はるか」です。糖度が40度にもなる紅はるかを、鹿屋市が定めた基準で栽培管理したものをブランド認定しています。全国規模の大会で最高賞を受賞する、スイートなさつまいもです。

ふかむ ちや 鹿屋深蒸し茶

笠野原台地を中心に多様な茶種が栽培されています。

県茶品評会で11回の産地賞を受賞するほか、国際GAP認証や、有機栽培の取組みも行われています。

また、茶業青年の会を中心に、お茶の入れ方教室や、イベントでの宣伝販売活動も行われています。





古江港（鹿屋港）



高須港

古江、高須の港について

古江港（鹿屋港）は、藩政時代から大隅と薩摩を結ぶ要港として栄えていました。1910（明治43）年から1913（大正2）年にかけて県営の第1期築港工事が始まり、その後、大正から昭和初期にかけて第2期築港工事や村営事業等が行われ港の整備が行われてきました。1936（昭和11）年から15年に鹿屋海軍航空隊の用船港として整備され、旧港を一般使用、新南港を海軍専用とし、1941（昭和16）年の鹿屋市制に伴い鹿屋港に改称しました。戦後、1953（昭和28）年に地方港湾指定を受け、1958（昭和33）年から改修工事を行い、現在に至っています。

高須港は、高須川河口を利用した天然の良港で、藩政時代より漁港・商港として栄え、甘藷をはじめ多くの農産物が港から積み出されました。古い護岸石垣は河口300mほど上流まで続いています。1927（昭和2）年に護岸工事、1932（昭和7）年から翌年にかけて船溜まり工事などの施設整備が行われました。

026

鹿屋市の水産業

鹿屋市の西部は鹿児島湾に面しており、古江港や高須港といった港を中心に海面漁業が行われています。特徴は養殖業が盛んで、その水揚量は海面漁業全体の約99%を占めています。また、内水面漁業では、生産量のほぼ全てをウナギ養殖が占めており全国でも有数の産地となっています。

○カンパチ

鹿屋市で養殖されるカンパチは全国2位の水揚量（平成30年度実績）を誇ります。鹿屋市漁協の「かのやカンパチ」は、鹿児島県認定のブランド魚です。

黒潮が絶えず流れ込むミネラル豊富な鹿児島湾で2年かけて育てられるカンパチは、生餌と配合飼料を併せて与えており、仕上げには抗酸化作用の高いバラのエキスを含む餌を与えることで、臭みが少なく、おいしいカンパチに育てあげられます。鹿屋市漁協ではカンパチの外国輸出の試みも行っており、今後輸出額の増加が期待されます。

○養鰻

内陸部では豊かな湧き水を利用した「大隅産うなぎ」の養殖が盛んで、鹿屋市串良町にある大隅地区養まん漁業協同組合から全国へ出荷されています。



カンパチ



かのやカンパチロウ

○その他の主な水産業

養殖業のほか、豊かな鹿兒島湾では、さまざまな漁業が行われておりそこびきあみぎよぎょう小型底曳網漁業では、ヒメアマエビなどのエビ漁、さいかいさいそうぎよぎょう採貝採藻漁業では、ひじき漁などが行われています。

○水産物の加工・消費

2022（令和4）年には鹿屋市漁協に新たな水産物の加工施設が完成し、消費者のさまざまなニーズに対応した加工商品の展開により、かのやカンパチのブランド力向上や、魚食の普及も期待されています。また、鹿屋市漁協に併設された「みなと食堂」では、その日に水揚げされたかのやカンパチのほか、新鮮な水産物を使用したおいしい料理を堪能することができます。



ギョギョギョ カンパチロウの紹介 コーナーですギョ！

鹿屋市のPRキャラクター「かのやカンパチロウ」は、頭は鹿屋市特産品の「かのやカンパチ」、身体はヒトの半魚人です。

トレードマークはビシッと決めた、スーツに革靴、金色のネクタイ。

特技は、かのやカンパチならではの活きのよさを感じさせる、キレッキレのダンス！

かのやカンパチPRソング「COME ON！ PARTY！かのやカンパチ！」に合わせたカンパチダンスで、仲間の「かのやカンパチ」のPRに泳ぎ回っています。

現在は、「鹿屋市PR特命係長」に任命され、鹿屋市の魅力を全国に広く発信するため奮闘中です。



カンパチロウ
世界記録チャ
レンジ動画



カンパチダンス
レクチャー動画



苗木の植付け
(人工造林)



雑草木の除去
(下刈り)

鹿屋市の森林状況

鹿屋市の森林は鹿屋市全体面積44,815haのうち、23,088ha(約52%)を占めています。

その内訳は、国の森林7,251ha(約31%)、県の森林481ha(約2%)、市の森林1,464ha(約6%)、個人の森林13,892ha(約60%)となっています。

また、植林された人工林の森林は13,500haであり、自然豊かでありながら整備された森林が多いのも特徴です。



人工林資源

027

鹿屋市の林業

○森林資源の循環利用を目指して

鹿屋市の森林面積は、鹿屋市全体の51.5%を占めており、森林には国が所有する国有林とそれ以外の民有林があります。(民有林とは、個人所有の私有林、県が所有する県有林、鹿屋市が所有する市有林のことです。)民有林には、スギなどを植林した人工林と自然に木が生えた天然林があり、民有林の人工林割合は60.5%となっています。

森林には水や空気をはぐくみ、災害を防止し、多様な生物を守り育てるなど、様々な役割がありますが、その役割を今後も発揮させるために、間伐などの森林の管理を続けていくことが重要です。

しかし近年、木材の需要が高まり、森林伐採が増えているなか、後継者不在などが原因で、森林所有者の森林への関心が低下し、森林伐採後に人工造林が行われない森林が増えてきたことで、森林の持つ様々な役割が損なわれることが心配されます。

そのようなことから、森林の持つ様々な役割を損なわず、森林整備を低コストで効率的に継続するために、機械導入や林道などの環境整備を行い、また将来に向けた森林資源の確保を図るため、伐採後の再造林の推進に取り組んでいます。



不要木の除去
(除伐)



伐採(間伐、皆伐等)

林野庁 森林整備事業のあらまし(令和4年度版)より

○鹿屋市の特用林産物

鹿屋市の特用林産物は、サカキやヒサカキ、シキミ、などの「^{えだもの}枝物」や「しいたけ」など、地域ごとに特色ある特用林産物が生産されています。

枝物は、主に畑やスギ林内に植樹し生産しています。出荷先は市場や花き卸売業者などを通じて関東や関西の都市圏へ出荷されています。

しいたけは地元で伐採したクヌギなどの原木を使用し、生産しています。農業協同組合などを通じて出荷されるほか、市内のスーパーや物産品販売所などでも販売されています。

また、上高隈町にある特用林産物出荷加工センターなどの加工施設では、地域グループなどが、特用林産物などを利用した食品加工を行っています。



サカキ



ヒサカキ



シキミ



しいたけ

サカキ＝榊
ヒサカキ＝姫榊
シキミ＝柘

枝物と言われても、一体何なのかわからない方も多いと思います。これらは、お供えに使うものです。お仏壇、神棚、お墓に、良く緑の葉がお供えされているのを見たことがあると思います。

地域やご家庭によっても違いはありますが、

	仏事	神事
サカキ	○	◎
ヒサカキ	○	○
シキミ	◎	×

上記のような使われ方をしているようです。ぱっと見た感じではどれがどの種類かわかりにくいと思います。気になる方は、ぜひ調べてみてください。



鹿屋内陸工業団地



前鳥居農工団地

鹿屋市の産業は？

鹿屋市の2019（令和元）年の市内総生産額は3,562億8,549万8千円となっています。内訳を産業別で見ると、高い順に製造業484億900万円（13.6%）、保健衛生・社会事業472億2,300万円（13.3%）、卸売・小売業452億9,300万円（12.7%）不動産業320億6,400万円（9.0%）公務320億1,700万円

（9.0%）となっています。

なお、本市の基幹産業である農業は、2020（令和2）年の農業産出額は439億7,000万円で、全国第11位となっています。

製造業事業者の規模や、盛んな製造業は？

市内89社のうち、従業員数300人以上の大規模事業者はわずか1社（1%）で、残りの88社（99%）は中小規模の事業者となっています。鹿屋市内の製造業事業者数の多い業種は、食料品製造業（28社）、飲料・たばこ・飼料製造業（11社）となっています。

028

鹿屋市の工業

鹿屋市には、89社（※）の製造業事業者があり、そこで約3,600人が働いており、地域特性である豊富な農林水産物を活用した食品製造・加工業や、一定の集積を持つ電子部品関連、金型製造業など、数多くの地場企業や誘致企業が立地しています。

※2020（令和2）年工業統計調査：従業員4人以上の事業者

○立地企業の変遷

立地企業の歴史は古く、大正時代から、甘藷の澱粉工場や蚕業・紡績企業などの誘致が行われており、当時はこれらの産業が隆盛を迎え、鹿屋市の産業振興を支えてきました。

その後、戦後の厳しい時代を乗り越え、日本の高度経済成長に伴い産業構造の転換が図られ、繊維産業等に変わり、食品、電子関連産業などの立地が進み、近代工業の発展とともに鹿屋市の工業の礎が築かれてきました。

特に、昭和40年代の高度経済成長期からは企業誘致に力を入れ、大手文房具メーカーの生産拠点となる工場の立地や、金型企業の集積など、新規産業の創出や雇用の場の拡大を図ってきました。

現在は、工業団地や工場適地などに、全国トップクラスの産出額を誇る農林水産業を活かした食品関連企



日本モレックス合同会社
鹿児島工場



株式会社サクラクレパス
鹿児島工場

業を中心に電子関連産業や情報通信業など、年々、誘致等によって立地した企業も増えています。

○市内の工業団地

現在、鹿屋市には4か所の工業団地があり、15社が進出し、約1,500名の雇用が創出されています。

全ての工業団地で操業率が、ほぼ100%となっており、活発な生産活動が行われています。

市内最大の規模を誇る鹿屋内陸工業団地は、川西町及び永野田町にまたがる約33haを超える土地を、鹿児島県開発公社が造成し、1978（昭和53）年に分譲を開始しました。現在、電子部品や食品関連、運送業など12社が立地しており、鹿屋市における工業振興の拠点となっています。

その他、吾平地域にある二つの農工団地には、自動車部品製造業など3社が進出し、輝北地域にある工業団地には太陽光発電事業が実施されています。

現在、既存の工業団地に余剰地がないため、今後、企業誘致を進める上で、新たな工業用地の確保が課題となっています。

かつて鹿屋市で世界的なビッグプロジェクトがあった？

大正時代から戦前にかけて、繊維産業は日本の最重要産業で、日本の輸出の70%を製糸が占めるほどでした。

当時、鹿屋市では日本一の売上を誇る紡績会社の誘致に成功し、当時としては画期的な養蚕から糸の製造まで一貫体制で行う計画が立ち上がりました。

最盛期には3,000人の従業員が働き、付近の民家に電灯がない時代に、同社には煌々と明かりが付き、ハイカラな別世界の印象を与えていたようです。

反響も大きく、県内外から視察が相次ぎ、アメリカからの視察もあったとのこと。

しかし、製糸工場の建設計画が進む中、化学繊維の普及により、養蚕業も下火となっていき、このビッグプロジェクトの夢は破れ、1951（昭和26）年に撤退を余儀なくされました。



大隅竜神大祭



秋まつり

○商店街・通り会

鹿屋市には中心市街地にある北田・大手町商店街振興組合等をはじめとする、複数の商店街・通り会が存在します。商店街の空き店舗の増加や後継者不足に悩まされる中、街の活性化のため、市、鹿屋商工会議所、かのや市商工会、商店街・通り会が連携しながら様々な地域のイベントを開催しています。

○商店街等の主なイベントカレンダー

- 7月
 - 秋葉神社六月灯
 - 打馬夏祭り
- 8月
 - 札元夏祭り
- 9月
 - 笠野原十五夜大綱引大祭
- 10月
 - 大隅竜神大祭
- 11月
 - 秋まつり（歩行者天国）
 - 本町イルミネーション
 - 水神祭り
 - にしはらフェスタ

029

鹿屋市の商工業

市の商業は、「リナシティかのや」などがある中心市街地を核として発展してきましたが、近年では西原・寿地区に多くの店舗が集中するなど、商業地域は広く市内全域に広がりを見せています。また、輝北・串良・吾平地域においては地元に密着した商店街が、地域独自の祭りやイベントを開催するなど、地域経済を支えています。

一方、事業所数については、2016（平成28）年経済センサス産業別事業所数の全産業から農業・林業・漁業を差し引いた商工業者数は4,548件となっており、2012（平成24）年経済センサスと比較すると28件減少しています。

その中でも、最も大きな割合を占める「卸売・小売業」が1,305件、全体の28.69%を占めていますが、2012（平成24）年経済センサスと比較すると21件減少しています。その主な理由は、郊外への全国資本のチェーン店等の出店による中心市街地の空洞化や消費者ニーズの変化、小規模事業者等の高齢化、後継者不足等によるものです。



イルミネーション



リナシティかのや

○鹿屋商工会議所

商工会議所は、商工会議所法に基づいて設立された特別認可法人で、地区内の商工業の総合的な発展を図るとともに、社会一般の福祉の増進に資することとしており、鹿屋商工会議所は1947（昭和22）年に創設されました。

商工業者（個人・法人）であれば、加入することができ、各種相談やセミナー、講習会を開催し、会員の経営支援等を行っています。

○かのや市商工会

商工会は、商工会法に基づいて設立された総合経済団体で、地域の事業者がお互いの事業や地域発展のために活動する団体です。

かのや市商工会は、2012（平成24）年4月に輝北町商工会と串良町商工会が合併して発足し、その後、2014（平成26）年に吾平町商工会と合併しました。経営相談、税務相談、金融相談など、様々な相談に応じています。また、国、県の補助を活用し、各分野の専門家の派遣も行っています。

リナシティかのや

鹿屋市大手町には2007（平成19）年に開業した複合交流施設「リナシティかのや」があり、若い世代から年配の方まで、幅広い年齢層の方に利用されています。

- 4階 屋上庭園
- 3階 芸術文化学習プラザ
健康スポーツプラザ
- 2階 情報プラザ
芸術文化学習プラザ
福祉プラザ
- 1階 情報プラザ

プラネタリウムや400席あるホール、ミニシアター、フィットネスホールなど、楽しめるスポットがいろいろとあります。屋上には庭園もあり、市街地を眺めることができます。

また、敷地内のどこかには、ハート型のタイルが隠れています。このタイルにカップルが一緒に乗ると幸せになれるといわれています。



かのや豚ばら丼



カンパチ漬け丼

「かのや豚バラ丼」 3つの条件

「鹿屋産の豚」のばら肉がメイン食材として使用されていること。鹿屋の市花である「ばら」が丼の中で、何らかの形で表現されている又は使用されていること。鹿屋に対する愛情が丼の中に注がれていること。

マスコットキャラクター「ばらブー」

豚ばら丼を通して、子どもたちにもっと豚を好きになってもらい、鹿屋が豚の町であることを認識してもらうため、市の職員がマスコットキャラクターを製作。市内の小中学生に愛称を募集した結果、「ばらブー」と名付けられました。実は、最後まで選考に残った名称は「豚田薔薇之助」だったそうです。



「ばらブー」



030

食のまち鹿屋（グルメ）

鹿屋市には、県内外からの観光客の舌をうならせる様々なグルメがあります。特に、肉などの素材を生かした食事（焼肉やとんかつ等）については、多くの方から評価を得ています。その中でも市として推薦するグルメについて紹介します。

○かのや豚ばら丼

鹿屋の二大地域資源である「豚」と「ばら」をコラボさせた「かのや豚ばら丼」。2014（平成26）年に市内の飲食関係者、畜産・食肉関係者、ばら観光関係者間の異業種連携をきっかけに、「豚ばら丼研究会」が発足し、多様な市民が「どんぶり」のように一緒になって取り組めるものとして「かのや豚ばら丼」が誕生しました。2016（平成28）年11月に霧島ヶ丘公園で開催された「全国丼サミットinかのや2016」では2日間で1,200杯、全国のスーパーでも1年で約23,000食が販売されるなど、ご当地丼として定着。今も市内数か所の飲食店で、そのお店独自の豚ばら丼が堪能できます。

○カンパチ漬け丼

身が引き締まり、あっさりとした脂が特徴の「かのやカンパチ」は、鹿屋市漁協直営の「みなと食堂」で手軽に味わえます。特に、カンパチ漬け丼は絶品です。



みなと食堂



ばらソフトクリーム

【開発秘話】

カンパチ漬け丼は、地元のしょうゆをベースにした「秘伝のたれ」にカンパチの切身を漬け込んで味付けしていますが、漬け丼自体は、その切身をごはんに乗せるだけのシンプルな構成です。

カンパチ漬け丼の開発にあたっては、「新鮮こだわりの【かのやカンパチ】を皆さんに食べてほしい。」「【かのやカンパチ】の美味しさを伝えたい。」という気持ちから、素材を生かすため、あえて技巧を凝らさないようにしたとのこと。

また、より多くの市民へ親しんでもらえるように、市が主催するこども料理教室のメニューにも、カンパチ漬け丼を取り入れています。



子ども料理教室の作成例

○その他のグルメ

鹿屋市内には、まだまだ多くの美味しいものがあります。例えば、畜産が盛んなので焼肉屋が多く、特産品のだっきしょ（落花生）を使った豆腐や饅頭、最中なども作られています。また、かのやばら園ではばらの香りのするばらソフトクリームが販売されています。

家でも鹿屋産の牛肉

スーパーなどに行けば、国産牛も普通に買えます。でも、そのお肉、どこで育ったお肉か考えたことがありますか？地元の生産者が育てた牛さんのお肉を食べたくないですか？

実は、スーパーなどで販売されているパック商品の商品ラベルや商品表示欄に記載されている個体識別番号をスマホなどで専用の検索ページに入ると簡単に調べることができます。

この個体識別番号は、消費者が牛肉のトレーサビリティ（生産及び流通の履歴情報の確認）を可能にするためのものです。下記QRコードで検索サイトに入れます。

あなたがよく知っている生産者が大切に育てた牛さんのお肉が見つかるかもしれません。

店舗により、独自の管理番号から個体識別番号を検索する所もあります。

